府立港南造形高等学校の取組み

（1）学校教育目標(めざす生徒像)

・造形活動を通して、「確かな学力」と「表現力・プロデュース力」、「企画力・発信力」の育成
・美術・工芸・デザインの第一線で活躍できる専門的職業人の育成
・美術・工芸・デザイン教育の日本のセンター校としての役割

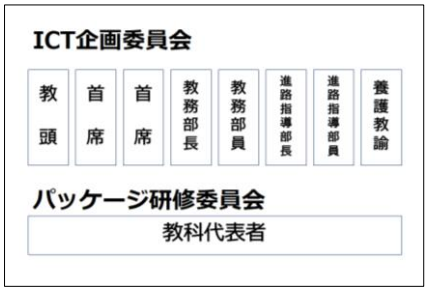
（2）主な取組みと組織体制の準備

体制

前年度まで	令和２年度
ICT 企画委員会を設置 ・タブレットの導入 ・ネットワークの整備	ICT 企画委員会に加えて、 パッケージ研修委員会を設置 ・教科の代表で構成 ・タブレットの効果的な活用について研究

今年度のパッケージ研修では、タブレットの活用を通じて、①授業の工夫・改善を行い、生徒の学力向上を図る。②家庭での学習習慣の定着を図る。③今後の授業のあり方を考えること、をテーマとしました。

港南造形高校にはすでにＩＣＴ企画委員会があり、タブレットの導入や、ネットワークの整備等で中心的な役割を担っています。今年度、パッケージ研修においてタブレットの効果的な活用について取り組むにあたり、教科の代表者でパッケージ研修委員会を立ち上げました。

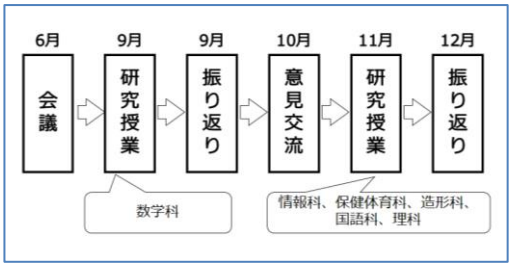


ICT 企画委員会とパッケージ研修委員会

（3）主な実践とその工夫

①　研究授業を２段階で実施

ICT の活用を各教科に広げていくために、年間で２回の研究授業を実施しました。まず、元々タブレットの活用案があった数学で研究授業を行い、活用方法として有効なのか検証を行いました。数学の研究授業では、２次関数のグラフの授業でタブレットを活用しました。アプリを使って２次関数のグラフや定義域を変化させます。板書ではどれだけ綺麗にグラフを描くことはできても、動かすことは容易ではないため、イメージしづらい定義域や値域の変化を視覚的に捉えることができます。タブレットを使用すると理解度が深まり、効果的な学習になりました。研究授業のあと、各教科の代表で、授業の振り返りを行いました。



パッケージ研修の流れ

数学での活用の様子

スクリーンやモニターで、資料を提示しながら授業をしたときの、黒板と ICT 機器との使い分けなど、話が広がりました。

数学の授業を参考に、各教科でタブレット機器を活用した授業の方

法があるかを検討してもらい、11 月の研究授業等で実践しました。その後それぞれの活用方法を委員会の場で振り返り、これからも使えるかどうか、他教科でも活用できるかどうかなどについて検討しました。

造形での活用の様子

〔各教科での活用例〕

造　形　科…写真を白黒加工して比較し、「明度」の感覚について確認した。

家　庭　科…調べ学習の成果をプレゼンテーションソフトにまとめ、タブレットを用いて発表した。

理　　科…天体の動きについて、映像教材で確認した。

保健体育科…動画サイトで薬物の危険性について学習した。

国　語　科…学習ソフト経由で小論文のテーマを出題と回収、共有した。

情　報　科…カメラでパソコンの内部を写し、その構造について学習した。

②　授業以外でも ICT を活用

・委員会のミーティングでも ICT 機器を活用

今年度は休校等の影響もあり、委員会でのミーティングは３回にとどめるかわりに、学校で導入している Classi を使って、情報を共有しました。委員会のミーティングでも、参加者はそれぞれの端末を持ちより、端末の画面をワイヤレスで大型モニターに提示しながら話し合いました。このように ICT 活用の機会を増やしていくことで、教員の情報活用能力が自然と高まっていきます。また、委員会は、これまでの業務の中の研究授業の企画や研究協議だけにとどまらず、クラウドサービスの使い勝手や活用方法について、教科間で情報交換する場にもなりました。

・休校時のホームルームもオンラインで

10 月に臨時休校となった際には、急遽オンラインホームルームを実施しました。事前の調査で、本校ではタブレットやスマホで学校外からインターネット環境に接続できる生徒が 99%であることが分かっていたため、オンラインホームルームを、ビデオ会議アプリ Zoom を使って実施しました。このときは、「オンラインでこのようなことができるのか」と、生徒以上に先生たちが盛り上がりました。はじめは興味を示さなかった先生も、実際にオンラインでつながっている様子を見て、「あんなこと、こんなことに使えそう」と各教科でアイデアが出てきたようでした。

オンラインホームルームの様子

生徒に対する授業アンケートでは、「タブレットの利用で分かりやすかった」という意見があり、ICT 活用の取組みは、生徒の学習に一定の効果があったと考えられます。

次年度さらに活用を広げていくためには、教員１人ひとりの ICT 活用能力を向上させ、タブレット機器を使いこなせるようになることや、簡単で効果的な活用法を共有し「こんな使い方でも良いのか」とハードルを下げ、多くの教員が ICT を活用するような雰囲気作りをすること、そして、ICT は毎時間使わなければならないのではなく、必要に応じて活用するものであることを理解してもらい、適切な活用法を広げていくことなどが大切であると考えられます。次年度以降も多くの人の経験を共有し、さらに ICT を活用しやすい環境をつくっていく予定です。